る。それも懐かしいぬくもりを宿した、こころなごむ絵だ。わたしは迷うことなく、幼年の日の懐かしい言葉を選んだ。「がたごと　がたごと」。ひそかに駄菓子屋の言葉と、私は呼んでいる。

話を戻せば、私の言葉だけで絵本『がたごと　がたごと』がくれる豊かなイメージを思い浮かべることは不可能である。また、西村の絵だけでも電車の動きはぎこちなくなるだろう。それにくらべて絵童話からは絵をなくしても、童話の文学的価値がそこなわれるということはない。いうまでもなく絵はあとからくっつけられたメッキのようなものだからだ。それにくらべて絵本から絵をなくすと、言葉はほとんどナニモノ?という印象を与える。理由は、いうまでもなく文が絵を想定しながら書かれているからである。言葉だけで自立してない弱い言葉。だが、この弱さの中にこそ、絵本の言葉の強さは宿っている。絵童話の絵と言葉は、いつ言葉が絵から分離独立しても、童話はいささかも困らない立場にいる。しかし絵本の絵と言葉は、たがいの分離独立は死であり、協働共存することが自分たちを生かす道だと認識している。絵童話のメッキの関係にくらべると、絵本の絵と言葉の関係は、合金だといっていいだろうか。

絵本の絵はタブロー的視点から見れば、各場面はかならずしも自立した絵とはいいがたい。だが、絵本の全体像を視野に入れ、その部分を構成するものとして描かれている一枚一枚こそが、絵本を画集ではなく絵本にしている。いささか誤解を招く表現になるが、文学的には自立していない文と、タブローとしては自立できていない絵によって、絵本は絵本になる。大切なのは絵本が絵本として自立することであって、言葉（文）だけが、また絵だけが自立することではない。分離独立は新生をもたらすが、協働共存もまた豊穣な世界を生むのである。絵本はそのことを私に教えてくれる。

ト書でござる

西村繁男がいかに優れた絵本作家だといっても、「がたごと　がたごと」や「ぞろぞろ　ぞろぞろ」だけで、あれだけの絵が描けるということはない。それでは一場面どころか、作品の全体像をつかむことがまず出来ないだろう。その補助線として、私は各場面にト書を書き加えている。たとえば「鉄橋を渡る電車。大正末期から昭和初期の建築がある。当時の服装で釣りをしている男」。それを西村に渡してある。もし、このト書を使わなければ、言葉は限りなく童話の文章に近くなっていくからだ。たとえば「でんしゃは、てっきょうをわたっていきます。なつかしいたてものです。おじさんのおじいさんが、うまれたころの……」。これほどまでに下手ではないにしても、そうなっていくしかない。しかし、私が出したかったのはそんな絵本ではな